

1	名古屋	浦里小学校	コウケツ ユウキ
			瀬瀬 祐輝
分科会番号	1	分科会名	国語教育（作文その他）

学びを自己決定しながら、話すことの力を高めることができる児童の育成（小6年）

1 何のために何を

私は、自分の学びを自己決定しながら、話すことの力を高めることができる児童を育てたい。令和5年名古屋市教育委員会の「ナゴヤ学びのコンパス」では、「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける」ことができる児童の育成を目指している。協働する中で、自分の困っていることを相談したり、相手に自分の考えを分かりやすく伝えたりするためには、話すことの力を高める必要があると考える。さらに、「自分に合ったペースや方法で学ぶ」ことも重視したい学びの姿の一つとして挙げられている。

そこで、私は「学びを自己決定しながら、話すことの力を高めることができる児童の育成」をテーマに研究を進めたい。自己決定とは、目標や相手、時間、方法などを自ら決定し、児童が自分のペースで学びを進めることである。児童が自己決定して学びを進めるためには、必要感や目的意識をもたせることが重要である。また、話すことの力とは、資料や話し方、話の構成などを工夫することができる力である。児童が話すことの力を高めるためには、教師が学習環境を整えることが大切であると考えます。

本学級の6年生24名は、どのような学習においても、素直に取り組む児童が多い。授業の中で、答えが決まっているものに関しては、多くの児童が挙手をして答える。しかし、自分の考えを発表する場面では、ほとんど挙手がなく、後ろ向きな態度が見られる。4月に実施したアンケートでは、国語科「話すこと・聞くこと」の分野に関して、「少し嫌い」「嫌い」と答える児童が3割ほどいた。理由を聞くと、「自信がない」「恥ずかしい」という答えが返ってきた。さらに、教師の指示を待ち、必要感や目的意識をもって学習に取り組むことができないことも原因の一つと考えられる。「自分で学習計画を立てて、授業に取り組んでいる」と回答した児童は、ほとんどいなかった。

2 何をどのように

(1) 児童に合った学習環境を整え、話すことの力を高めるための工夫

児童に合った学習環境を整え、話すことの力を高めるために「話すことの種」を用いる。「話すことの種」とは、ICTを活用して、資料や話し方、話の構成などの工夫について、文字情報や動画を例示として用意したものである。[資料1] 分かりやすく相手に伝えるために、自分には何が必要なのか、どのように話をするとよいのかを児童に考えさせる。そして、話すことの力を高めることができるようにする。

情報の扱い方	発表の仕方
<input type="checkbox"/> 情報収集	<input type="checkbox"/> 資料の活用
<input type="checkbox"/> 情報整理	<input type="checkbox"/> 目を見て話す
話し方	話の構成
<input type="checkbox"/> 間の取り方	<input type="checkbox"/> はじめ・中・終わり
<input type="checkbox"/> 強弱	<input type="checkbox"/> 順序を表す言葉
<input type="checkbox"/> 抑揚	<input type="checkbox"/> 文を短くすること など

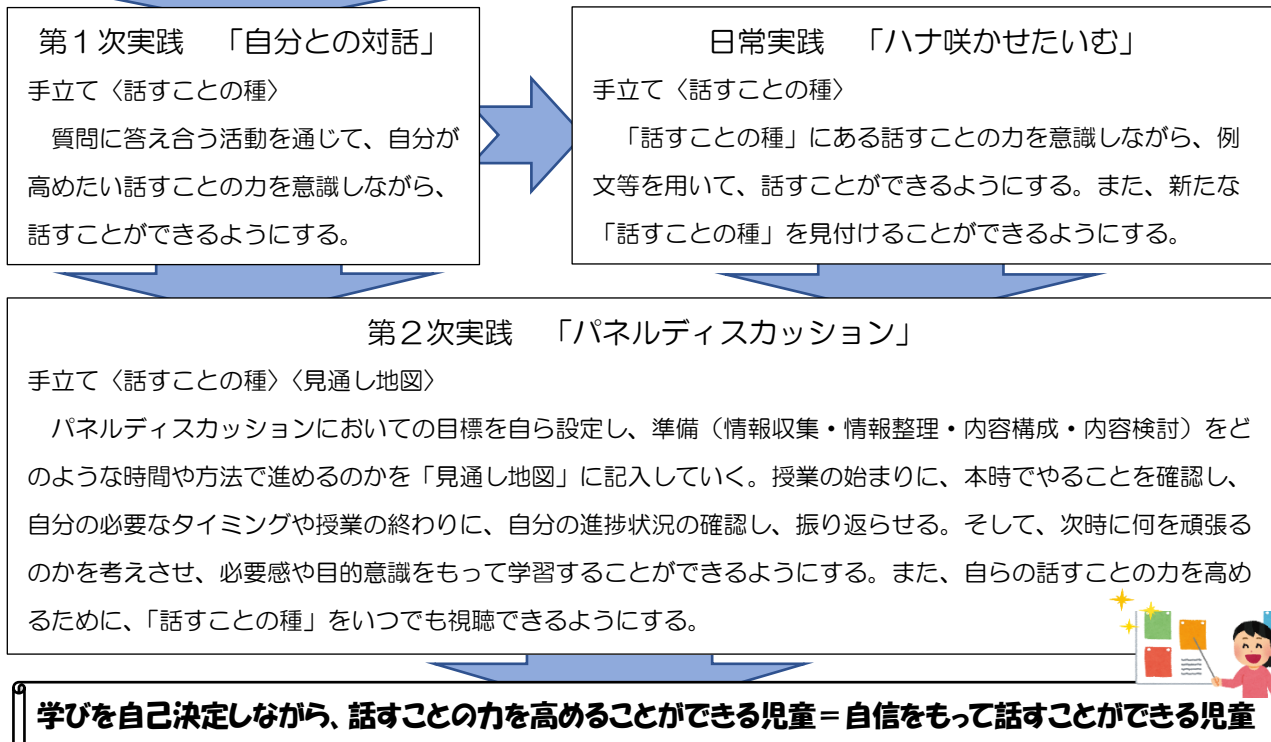
[資料1] 「話すことの種」の項目

(2) 必要感や目的意識をもって、学びを自己決定することができるようにするための工夫

必要感や目的意識をもって、学びを自己決定することができるようにするために「分析シート」と「見通し地図」を用いる。「分析シート」を活用して、まずは今の自分の話すことの力を分析し認識させる。そして、「見通し地図」を用いて、情報収集・情報整理・内容構成・内容検討の段階を自分の必要に応じて、「①何を」「②いつ」「③どのくらい」「④どのように」行うのか、学習計画を立て、自己決定させる。授業の始まりに、本時でやることを確認し、自分の必要なタイミングや授業の終わりに、自分の進捗状況の確認と振り返りをさせる。そして、次時に何を頑張るのかを考えさせ、必要感や目的意識をもって学習することができるようにする。

3 実践計画

話すことに自信がない児童 = 必要感や目的意識がなく、話すことの力が身に付いていない児童



4 実践の様子

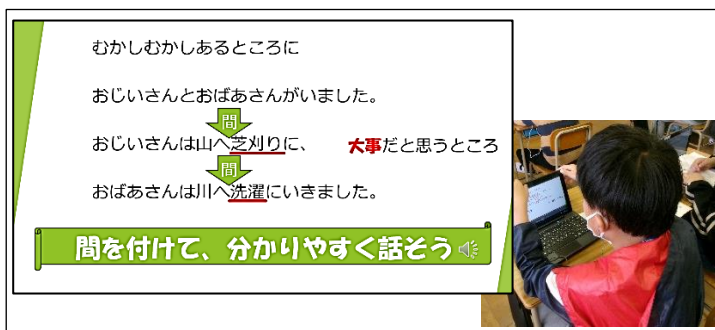
(1) 第1次実践 「自分との対話」 (5月)

① ねらい

質問に答え合う活動を通じて、自分が高めたい話すことの力を意識しながら、話すことができるようにする。

② 児童の様子

児童から、友達に聞きたいこととして、「どんな職業に就きたいか」「行ってみたい場所はどこか」など、6つの話題を出させた。そこから、サイコロで話題を決定した。児童には、ただ話をするのではなく、高めたい力を考えながら取り組ませた。話すことに自信がない児



[資料2] 「話すことの種」から「間の取り方」を選び、視聴する様子
児童には、「話し方」の力、話の作り方がよく分からない児童には、「話の構成」の力を伸ばすとよいことを伝え、児童に自己決定させた。事前のアンケートにおいて、みんなの前で発表することが「恥ずかしい」から少し嫌いとしていたA児は、高めたい力として「話し方」の力を選択していた。その後、自分が高めたい力を意識して、「話すことの種」の動画を視聴し、沖縄に行きたいことを話すこととして、準備を進めることができた。[資料2]その後、4人のグループで発表会を行った。お互いに動画を撮り合いながら行い、後で自分の振り返りに役立てるようにした。A児は、「少しだけ自信をもつことができた。間を空けるのは意識できた。次は、強弱を付けてみたい。」と振り返り、話すことに対して、自信が芽生え、次の発表をよりよくしたいと前向きに捉えるようになった。

③ 成果（○）と課題（●）

- 「話すことの種」を用いたことで自分の高めたい話すことの力を意識しながら、話すことができた。
- 「話すことの種」の内容が少ないこと、児童が知りたいこととずれていることがあった。児童の困り感に合わせて内容を考えたり、児童とともに作り上げたりする必要がある。
- 話すことの力を自己決定させたが、必要感や目的意識をもって学習するには、自己決定する内容が少ないように感じた。児童が自分のペースで学習に取り組むことができるように自己決定できる幅を広げていきたい。

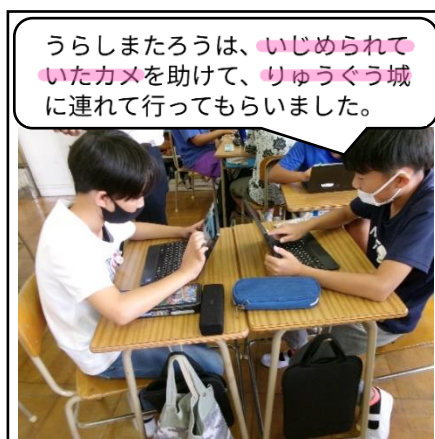
(2) 日常実践 「ハナ咲かせたいむ」

① ねらい

自分の話すことの力を伸ばすとともに、「こんなふうに話したい」という姿をもつことができるようにする。

② 児童の様子

「話すことの種」から、「強弱」や「間の取り方」、「声の高低」など、いくつかの話し方の工夫について取り上げ、隣の児童と例文を用いて話をさせた。「今日は、強弱を意識して話してみよう。」と、浦島太郎の話の中から自分が強調したいところに線を引き、強弱を意識して話すことができた。[資料3] その後、自分が文章のどこを意識して話をしたのかが、隣の児童に伝わったかを確認め合うようにさせた。A児は、「線のところが、隣の人に伝わった。」とうれしそうに話をしていた。何度か「ハナ咲かせたいむ」を重ねていくうちに、ある児童から、「強弱と間を



[資料3] 「ハナ咲かせたいむ」の様子

合体させてもいいの？」と質問が出た。この発言を学級全体で取り上げ、実際にみんなで試してみると、「すごく分かりやすかった。」と感想を伝え合っていた。話すことの力を見付けたり、高めたりする楽しさを実感している様子が見られた。また、「今度、調べたことを発表する単元があります。どんな力を高めてみたいですか。」と聞くと、「話の内容（構成）を考えるとときに伝わりやすくなる工夫はないかな。」「最初、何を話していいのか分からなくて困る。」「もっと、いろいろな工夫をしてみたい。」という児童の発言があった。そこで、新たに「話すことの種」を見直すことにした。

③ 成果（○）と課題（●）

- 「話し方」についての話すことの力を高めることができた。
- 児童とともに新たな「高めたい。」「やってみたい。」と思えるような話すことの力を見付けることができた。
- 日常実践という短い時間の中では、「話し方」の力を高めることしかできなかった。「話の構成」や「情報の整理」などの他の力を高めるためには、自由に考えることができる時間が必要であると感じた。

(2) 第2次実践 「パネルディスカッション—おすすめの修学旅行の行先を伝えよう—」（6月）

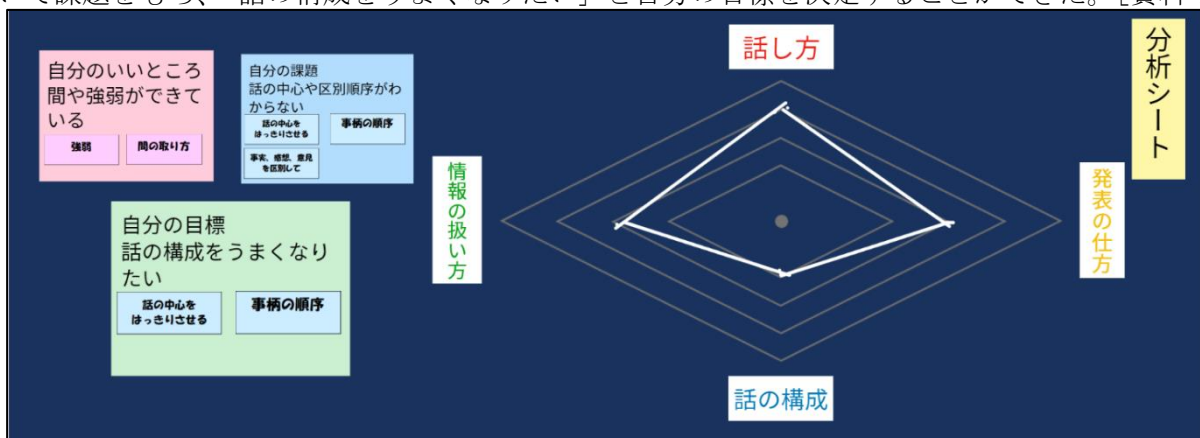
① ねらい

学びを自己決定することで、考えを分かりやすく伝えるために、自分に必要な「話すことの力」を高めることができるようにする。また、パネルディスカッションを通して考えを広げたり、深めたりすることができるようにする。

② 児童の様子

第1時：見通しをもたせる

単元を始める前に、「話し方」「発表の仕方」「話の構成」「情報の扱い方」という観点から、教師が用意した見本の動画と第1次実践の様子や日常実践の様子とを比べ、自分の話すことの力を「分析シート」を用いて分析した。この分析を基に、自分のいいところ・自分の課題を見付け、自分の目標を設定した。A児は、第1次実践で「話し方」には自信をもっており、高めに自己分析をしていた。しかしながら、「話の構成」に関しては、自信をもつことができず、低めの分析をしていた。「話の中心をはっきりさせる」「事柄の順序」「事実・感想・意見を区別する」などの話の構成について課題をもち、「話の構成をうまくなりたい」と自分の目標を決定することができた。[資料4]



[資料4] A児の「分析シート」

その後、単元の見通しをもたせ、自分の目標とともに「見通し地図」を作成した。パネルディスカッションにおける発言の準備（情報収集・情報整理・内容構成・内容検討）を自分のペースで進められるように計画を立てた。自分の目標に対して、どの準備の段階に時間を使いたいのかを考え、内容構成の段階に多くの時間を使うことができるように、3時間の準備の時間を割り振り、学習計画を立てることができた。[資料5]



[資料5] A児の「見通し地図」

第2～4時：パネルディスカッションに向けての準備

おすすめの修学旅行の行先についてのパネルディスカッションに向けての準備を行った。授業のはじめには、学習グループの児童と本時の学習をどのように進めていくのかを共有した。そうすることで、本時の学習の進め方が明確になった。「内容の構成がうまくできないときは、『話すことの種』を見るといいよ。」「僕は、清水寺の音羽の滝について紹介しようと思っているよ。」と学習グループの中でアドバイスをする姿も見られた。

その後、誰とどこで準備を進めるのかは自分たちで決め、それぞれで準備を進めていった。黒板の「見通し地図」を拡大したものに、ネームプレートを張り付け、誰がどの準備の段階を進めているのかを視覚的に確認できるようにした。[資料6]そして、自分と同じ準備の段階を進めている児童と準備に取り組む児童、同じおすすめの場所を紹介するし児童と準備に取り組む児童、個別で準備に取り組む児童など、様々な形で学習を進めていた。ある児童は、同じ準備の段階を進めている児童と集まり、自分が困ったときに話を聞きに行き、「私は、『中』の部分に、クイズを入れてみたよ。」とアドバイスをもらうことができた。また、情報収集・情報整理・内容構成・内容検討の準備の段階で「話すことの種」を視聴できるようにした。児童は、必要感や目的意識をもって、自身の発表に生かすことができていた。「話の構成」を課題としていたA児は、「話すことの種」から、「順序を表す言葉」を視聴し、「まず……。次に……。」と、順序を意識して自分の発表原稿を考えることができていた。[資料7]他にも、「話し方」や「発表の仕方」など、この授業でできたことや次に頑張ることを学習グループで話し、「見通し地図」に追記した。次時の目標が変更になる場合は、赤で取り消し線を書き、新しい目標を設定させることで、自己調整を促した。



[資料6] 黒板の「見通し地図」

まず音羽の滝について説明します。音羽の滝最大の特徴は、三本に分かれた筈(かけい)です。三つそれぞれに違った意味があり、ご利益も異なります。正面から見て右端が「延命長寿」のご利益、真ん中が「恋愛成就」、左端が「学業成就」です。

次に景色について説明します。「清水の舞台」で有名な本堂は清水寺を訪れる上では欠かせないスポットです。崖からせり出した舞台から望む景色は、その美しさのあまり言葉を失ってしまうほど。

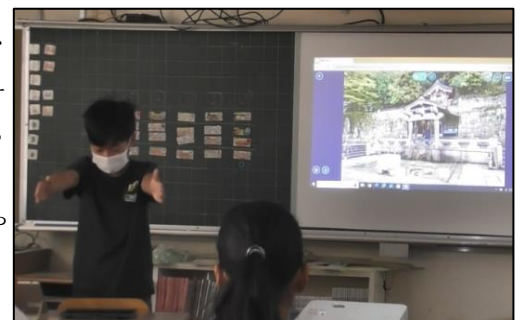
三本の中から一本を選んで水を一口飲み、一つだけ願いをかけるのがマナーなのだとか。飲みすぎてしまうと欲深さを見抜かれ、願いが叶わなくなるといわれています。

本堂の舞台は四季折々のふうびな情景を織りなす清水寺において、欠かせない存在となっています。

[資料7] A児の発表原稿

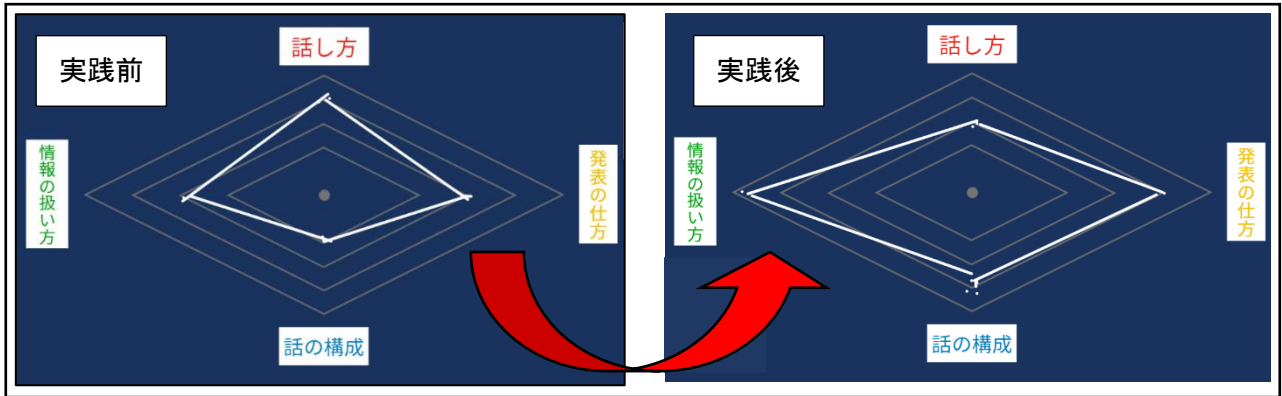
第5～6時：パネルディスカッション・振り返り

A児は、パネルディスカッション本番に清水寺について、「話の構成」を意識することに加えて、ジェスチャーも交えながら、みんなに分かりやすく話をすることができていた。[資料8]他の児童も間を空けて話したり、クイズを入れたり、問い掛けの言葉を入れたりするなど、工夫して分かりやすく話すことができていた。また、互いに質問し合いながら、おすすめの修学旅行の行先についての考えを広げることができていた。



[資料8] A児のパネルディスカッションの様子

パネルディスカッション後には、単元を通しての振り返りを行った。「分析シート」のレーダーチャートにもう一度取り組み、単元の始めに行ったレーダーチャートと見比べるようにした。それを



[資料8] A児の分析の変容

基に、自分の話すことの力がどのように高まったのかを中心に振り返りをした。A児は、「話の構成」や「情報の扱い方」、「発表の仕方」の力が改善され、「話し方」の力が低くなったと自己分析をした。[資料8] 振り返りには、「話の構成がうまくなったり、ジェスチャーがよくなったりしたと思った。強弱や間を空けるのはあまりできなかった。」と記述していた。[資料9]他の児童も、「時間を使った分、分かりやすい構成で発表ができた。」「準備の進み具合を調整できたから、ジェスチャーなどの工夫を入れることができた。」などと記述しており、自分に合った学習計画を立て、自己決定しながら学習することで、話すことの力を高めることができていた。

ふりかえり
パネルディスカッションの授業全体を通して、どんな話すことの力が高まったのかをふりかえりましょう。

理由

みんなの前で話して話の構成がうまくなったりジェスチャーがよくなったりしたと思った。逆に話してみても強弱や間を開けるのはあまりできていなかった。だから次は話し方を意識してやろうと思う

[資料9] A児の振り返り

③ 成果 (○) と課題 (●)

- 「分析シート」と「見通し地図」を活用して、自分の話すことの力を認識したり、いつ、だれと、どのくらい、どのように学習するのかを自己決定したりすることで、必要感や目的意識をもって学習することができた。
- ICTを活用し、文字情報や動画で「話すことの種」を準備したことで、児童は自分の見たいときに、見たいものを調べることができた。その結果、児童一人一人にあった話すことの力を高めることができていた。
- 「今日は計画通り全て終わらせることができた。」というように、自分の立てた学習計画を達成できたかに目が向きがちになり、学んだことの振り返りを日々の学習の中で行うことができなかった。「話し始めは、問い掛けやクイズを取り入れると聞き手の興味を引かせることができると分かったので使っていきたい。」など、自分の身に付けたい話すことの力を意識して振り返りができるような声掛けが必要だった。

5 おわりに

実践後に行ったアンケートでは、国語科「話すこと・聞くこと」の分野に関して、「好き・少し好き」と答えた児童は約 87%いた。その中には、「みんなに自分の考えを知ってもらえるのが楽しい。」「自信をもって話すことができるようになった。」と話をしている児童もいた。自分の目標をもち、学習計画を立てて、学習を進めていくことで、必要感や目的意識をもって学習に取り組むことができていた。しかし、「嫌い・少し嫌い」と答えていた児童も少数いた。話すことの力を高め、自信をもって話すことができるように、今後も児童が必要感や目的意識をもつことができる授業を考えていきたい。